カット／えん馬場敏美

東日本大震災から10年、あの未曽有の大災害は私たちの「未来」でもあります。3人の文章で、それぞれの「あの時」を振り返ります。

～ その時ヘルパーは ～

ケアサポートえん／海野裕子

地震発生時は自宅にいた。棚の上の飾り物と多量のほこりが落ちてきた。とりあえず家の中の状況を確認して、Aさん宅へ向かう。15時15分時間通りに到着。エレベーターが停止しているので、非常階段で13階まで上がる。途中強い余震があって、手すりにつかまってしゃがみ込む。とても怖かった。

訪問リハビリのＩさんが時間を延長して付き添っていてくださった。私と交代に帰られる。Aさんはよほど怖かったようで、動揺が収まらず、自力では椅子から立ち上がれないような状態だった。落ち着いてもらえるように、お茶をいれてお話を伺う。

マンションの13階なので揺れも相当に激しかったようで、食器棚、お孫さんの勉強机が移動し、ものが散乱。トイレの水、お風呂の湯があふれて床が濡れている。Aさんの居室ではテレビが倒れ、写真や位牌がベッドの上に置いてある。床に落ちたのをIさんが拾い上げてくださったとのこと。携帯電話も固定電話もつながらない。シャワーのお湯も出ないので、入浴できるような状態ではない。事務所に確認が取れないので、Aさんにも確認して入浴を中止し足浴を行う。終了後ベッドで横になることをお勧めするが、一人になるのは怖いとそのままリビングの椅子で過ごされる。

同じ階の方が様子を見に来てくださる。私の家族から安否確認のメールが入ったので、非常時なのでお断りして「大丈夫」と返信する。

Aさんの家族とは電話がつながらない。ご本人から依頼されたわけではないが、余震のたびに動揺されていたので、「娘さんが戻られるまでいますよ」と伝えると少し安心した様子。18時15分、娘さんがお子さんを連れて帰宅。「Iさんやヘルパーさんがいてくれる日でよかった」と喜んでくださる。いつもより1時間多く滞在して退室。

帰宅後事務所に報告。後で悔やんだことがひとつ。Aさん宅近くには一人暮らしの利用者さんが他にもいらっしゃる、立ち寄って安否確認をするべきだった。今後、ミーティングなどで話し合い、マニュアルにするなどの対応が必要だ。

（ケアサポートえん記録より）